

グローバルファンド理事会、変化するグローバルヘルスを取り巻く環境に対応するための戦略的方針を決定

リスク管理の強化に向けたフレームワークと、保健医療製品へのより持続可能なアクセスを実現する枠組みを承認

2026 年 7 月 14 日

ジュネーブ世界エイズ・結核・マラリア対策基金（グローバルファンド）の理事会は、7 月 9 日から 10 日にかけて開催した第 55 回理事会を終え、グローバルヘルスの情勢が急速に変化する中で、より大きな成果を実現するためのパートナーシップの能力を強化すべく、2 つの重要な施策を承認しました。

理事会は、2026 年上半期の活動を振り返ることから始まりました。第 7 次事業実施期間（GC7）の最終年度に当たる本年は、さまざまな混乱要因があったにもかかわらず、これまでの同時期と比べて最も高い水準で効率的な事業実施が進んでいます。今年に入ってすでに、HIV 予防に革新をもたらす「レナカパビル」が、9 か国で導入されています。5 月末までに 2 万人がこの予防薬の投与を受け、さらに 6 月末までにその人数は 4 万 9000 人と 2 倍以上に増加しました。結核やマラリア対策における新たな技術である、新しい NPOC（ニア・ポイント・オブ・ケア）検査や空間用虫よけ（空間忌避剤）についても、各国および技術パートナーとの連携のもと、導入が進められています。

各国では、第 8 次事業実施期間（GC8、2027～2029 年）に向けた準備が、限られたスケジュールで進められる中、資金の割当額の削減に伴い、何を優先し、何を見送るかという難しい判断が大きな焦点となっています。各国が提出する初回の資金供与要請には、プライマリ・ヘルスケアをより強化するための保健サービスの統合や、グローバルファンドによる支援終了（トランジション）に向けた明確な移行スケジュールの策定など、新たな戦略的方針が反映されています。第 8 次事業実施期間では、35 か国と 3 つの複数国プログラムにおける 61 のプログラムがグローバルファンドの支援から移行します。さらに、第 9 次事業実施期間では、12 か国における 21 のプログラムへの支援が終了する予定です。

「今、グローバルヘルスは重要な転換期を迎えています」と、グローバルファンド理事会のロスリン・モラウタ議長は述べています。「各国で紛争や異常気象、感染症の拡大による影響がますます深刻化する一方で、グローバルヘルスを支える資金環境は、より厳しさと不透明さを増しています。こうした課題があるからこそ、HIV/エイズ、結核、マラリアの流行を終息させるという私たちの使命は、その重要性を失うどころか、ますます高まっています。こうした課題に立ち向かうには、大胆な決断と適切なリスク管理に加え、各国がより強靱で自立した保健システムを構築できるよう、あらゆる努力を尽くさなければなりません」

グローバルファンド以外の資金を活用した保健医療製品の調達

2025 年、グローバルファンドは約 12 億ドルの保健医療製品の調達を管理しました。そのうち、プール調達メカニズム（PPM）を通じて 80 か国以上に供給された、無償資金による保健医療製品の調達額は 10 億 2000 万ドルに上りました。各国がグローバルファンドの支援から円滑に移行するために重要なのは、グローバルファンドの市場形成戦略を通じ、命を救う保健医療製品へのアクセスを継続できるようにすることです。

この目的を達成するため、理事会は新たな方針を承認しました。この方針では、グローバルファンドの無償資金以外の資金を活用し、グローバルファンドの調達プラットフォームを通じて、品質が保証された手頃な価格の保健医療製品へのアクセス拡大を図ります。これにより、各国が自立を進める中でも、必須医薬品や保健医療製品への安定したアクセスを維持できるよう支援します。この取り組みを後押しするため、理事会はあわせて、代金の前払いが難しい国に提供するブリッジ・ファイナンスを提供する独立採算型の資金メカニズムを承認しました。このメカニズムには、各国を支援するとともに、保健医療製品へのアクセスを妨げる障壁を減らすため、事前に資金を提供する仕組みが組み込まれます。

「各国が自国の保健システムの財源確保により大きな責任を担うようになっていても、品質が保証された手頃な価格の保健医療製品へのアクセスを失うようなことがあってはなりません」と、グローバルファンド理事会のビエンス・ガワナス副議長は述べています。「今回の決定は、グローバルファンドの最大の強みの一つを生かしたものです。これにより、各国やパートナーが、より持続可能で強靱な保健システムへの移行を進められるよう、市場形成に関する専門的知見や調達力の活用を支援していきます」

リスク報告書およびリスクアペタイト・フレームワーク

理事会は、組織の「リスクアペタイト・フレームワーク」を改訂し、ますます複雑化する事業環境の中で、確かな情報に基づいた成果重視の意思決定を行うという姿勢を改めて示しました。

また、事務局は「2025 年リスク管理年次報告書」を提出しました。同報告書では、グローバルファンドは組織としての強靱性を維持し、2025 年を通じて主要なリスクに適切に対応した一方で、活動を取り巻く環境はますます不安定かつ厳しさを増しており、その状況は 2026 年にさらに深刻化すると予測されています。

これを受け、理事会は、複雑さを増す事業環境の中でも十分な情報に基づき成果を重視した意思決定を行う能力を強化するため、改訂版「リスクアペタイト・フレームワーク」を承認しました。改訂されたフレームワークでは、単にリスクを監視することから積極的に管理することへと重点を移し、ガバナンス体制の明確化、意思決定プロセスの透明性向上、新たなリスクの早期特定を実現します。

GC8 戦略のコスト試算および運営経費

グローバルファンド事務局は、理事会が承認した 9 億 3000 万ドルの運営経費の枠内で、GC8 戦略を実施するための計画を提示しました。限られた資源のインパクトを最大化するため、事務局は短期・長期の二本柱からなる組織改革戦略を提案しました。短期的には、出張の削減や希望退職制度の活用、監督・保証業務の効率化による経費削減を進める一方、長期的には、各国の状況に応じた支援体制への転換、AI・自動化の活用拡大、共通業務の集約化などを通じて、事務局の運営モデルを見直していく考えです。

事務局長選任プロセス

「第 3 回事務局長選任プロセス進捗報告書」では、選考は予定どおり進んでおり、候補者への働きかけの段階から正式な審査段階へと順調に移行したことが報告されました。

倫理報告書

理事会は、倫理室の「2025 年年次報告書および意見書」を確認しました。同報告書では、グローバルファンドは引き続き強固な倫理・コンプライアンス遵守のフレームワークを維持しており、組織が管理可能なリスクは適切に管理され、未対応の倫理違反は確認されなかったと評価されています。また、報告書では、より複雑化する事業環境に対応するため、リスクに基づくアプローチの強化、テクノロジーの活用、そしてパートナーシップ全体で倫理とアカウンタビリティを重視する組織文化を醸成していくことの重要性が強調されました。

ガバナンスの実効性

理事会は、急速に変化するグローバルヘルスを取り巻く環境においても、グローバルファンドのガバナンス体制がその役割を十分に果たし続けられるよう、ガバナンスモデルの実効性を高める取り組みについて議論しました。この議論では、プロセスの簡素化と重複の削減、意思決定の明確化を進めるとともに、パートナーシップの根幹を成す多様な関係者の参画、それぞれの立場からの声の反映（包摂性、多様なステークホルダーの参画）そして信頼という原則を維持しながら、ガバナンスの機動性、効率性、戦略性を高める方策に重点が置かれました。

監察官室による年次報告書

理事会は、監察官室（OIG）の「2025 年年次報告書」を受領しました。同報告書では、グローバルファンドは引き続き適切なガバナンスと内部統制の下で運営されており、その目的の達成を妨げるような重大な不備は認められなかったと結論付けられています。一方で、急速に変化する事業環境に対応するため、第 8 次事業実施期間において、事業の実施を優先し、国内政府資金供与を強化するとともに、業務の効率化や、より戦略的なリスク管理を進めていく必要があると指摘しています。

評価と学習

理事会は、グローバルファンド全体の意思決定を支援するため、より迅速で、より実用的かつ費用対効果の高いエビデンスを提供することを目的とした、新たなエビデンス・学習モデルの導入案について議論しました。この新たなアプローチは、監察官室の監査で示された提言を踏まえたものであり、エビデンスの活用と学習を組織の計画策定や意思決定のプロセスにより密接に組み込むことを目指しています。一方で、客観性が特に求められる分野では、引き続き独立した評価を活用していく方針です。今後の取り組みの方向性を検討するに当たり、事務局には多くの意見や提案が寄せられました。

グローバルヘルスのエコシステム

理事会に先立ち、変化するグローバルヘルスのエコシステムをテーマとしたパネルディスカッションが開催されました。登壇したジャン・カセヤ博士（アフリカ疾病予防管理センター）、ジョ

ー・ファーラ博士（Eastern Southern Africa & West and Central Africa 理事区代表）、エデム・アドゾゲニユ博士（AfroChampions/Accra Reset）、ケイティ・キッド・ライト氏（HeAR-CSO プロジェクト/Global Fund Advocates Network）、ピーター・ピオット博士（ロンドン大学衛生熱帯医学大学院/Accra Reset ハイレベルパネル）、ブルース・エイルワード博士（WHO）、ジョイ・プマフィ博士（マラリア対策アフリカ・リーダー・アライアンス）は、財政的制約、変化する地政学的情勢、そして各国の主体的な取り組み（カントリー・オーナーシップ）への期待の高まりを踏まえ、グローバルヘルスのパートナーシップが今後どのように適応していくべきかについて議論しました。登壇者は、各国および地域のリーダーシップの強化、役割とアカウンタビリティの明確化、そしてグローバルファンドのマルチステークホルダー・パートナーシップ・モデルの重要性を改めて強調しました。また、長期的な保健分野の成果を維持するためには、より機動的で、連携の取れた、各国主導のアプローチが必要であるとの認識が示されました。

「グローバルヘルスを取り巻く環境は急速に変化しています。しかし、人々の命を救うという私たち共通の使命は、決して変わることはありません」と、グローバルファンドのピーター・サンズ事務局長は述べました。「パートナーシップを強化し、各国の主体的な取り組みを支え、イノベーションと成果を重視することで、私たちはこれまで以上に効果的に連携し、よりよい成果をもたらすことができます。それにより、人命を救うイノベーションを最も必要とする人々へ確実に届けるとともに、1ドルの投資効果を最大化することができるのです」

理事会では、変化するグローバルヘルスのエコシステムにおけるグローバルファンドの役割について議論が行われました。その中で、組織の運営モデルの強化、パートナーシップのさらなる深化、そしてグローバルヘルス全体のより広範な改革への貢献の重要性が改めて確認されました。さらに、支援の重複を減らし、連携を強化するとともに、グローバルファンドのパートナーシップが支援する人々やコミュニティへの成果を最大化するためには、各国の主体性、コミュニティのリーダーシップ、市場形成、大規模調達といったグローバルファンドならではの強みを生かしていくことが重要であるとの認識が示されました。

理事会では、GAVI ワクチンアライアンスをはじめとする主要なパートナーとの連携強化の進捗について確認が行われました。これは、各国への支援の方向性を合わせ、各国による保健分野の資金やサービスへのアクセスを簡単にすることを目的としています。また、グローバルファンドとGAVI ワクチンアライアンスは、事務負担の軽減、マラリア対策および保健システムへの支援の連携、結核対策や新たな結核ワクチンに関する共同アプローチの検討、さらには業務の効率化を、今後の連携における重点分野としました。これらの取り組みは、各国がより一体的で、効果的かつ持続可能な保健プログラムを実施できるよう支援するとともに、グローバルヘルスのエコシステム全体におけるより広範な改革を前進させることを目的としています。

次回の理事会は 10 月下旬に開催される予定です。あわせて次期事務局長の選出も行われ、その選出手続きの完了後、新たな理事長および副理事長が就任します。

—終—

世界エイズ・結核・マラリア対策基金について

世界エイズ・結核・マラリア対策基金（グローバルファンド）は、エイズ、結核、マラリアの流行を終息させ、全ての人に健康かつ安全で、より公平な未来を築くための世界的なパートナーシップです。年間最大 40 億米ドルの資金を調達し、最も影響が深刻な 100 か国以上における、三大感染症との闘い、感染症を助長する不公平の克服、保健システムの強化、パンデミックへの備え

に投資しています。世界のリーダー、コミュニティ、市民社会、ヘルスワーカー、民間セクターと連帯し、最も効果的な方策を見出し、世界規模で展開しています。2002 年の設立以来、グローバルファンドのパートナーシップの支援により 7000 万の命が救われました。

詳細についてはウェブサイトをご覧ください：www.theglobalfund.org

X をフォロー <https://x.com/globalfund>

フェイスブックに参加 <http://www.facebook.com/theglobalfund>